

中原遺跡

— 第3次発掘調査報告 —

平成24（2012）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水など豊かな自然に囲まれた文化都市であり、県南における中核都市としても発展を続けています。こうした環境の下、市内には先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在し、古よりの恵まれた歴史を今に受け継いでいます。

ここに報告する中原遺跡は、これまでの発掘調査の成果によって古墳時代から江戸時代の集落遺跡であることが判明していました。今回の宅地造成に先立つ調査においては、新たに縄文時代の生活跡が確認されるなど、当時の生活の一端を垣間見ることができる貴重な資料が出土しています。こうした資料の蓄積によって、地域の歴史に新たな知見がもたらされることを期待するとともに、文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きましたコアガステック株式会社をはじめ関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ちコアガステック株式会社の委託を受けて実施した、中原遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査に係わる事務は、久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・塚本明美が行った。また、本書に掲載した遺物の実測及び図面の浄書は廣木が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は6×9判で廣木が、遺物写真は6×9判で当課の塚本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はNK B003、調査番号は201105である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存値または復元値を示す。色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。

登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

9. 本書の執筆・編集は廣木が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 中原遺跡の位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 考察	12

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成23年6月6日、コアガステック株式会社代表取締役の田中昌明氏より、久留米市梅満町576-3、579-7、593-11、596-5における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに始まる。当該地一帯は、周知の遺跡である中原遺跡に含まれており、6月10日に確認調査を実施した。結果、対象地の北側部分において遺構が検出されたことから、発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、造成地内の新設道路部分については恒久的構築物となることから発掘調査の対象とし、調査費用を原因者負担とすることを確認した。平成23年7月1日にコアガステック株式会社から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成23年7月8日にコアガステック株式会社代表取締役田中昌明氏と久留米市長檜原利則との間で、「中原遺跡第3次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成23年7月20日から8月12日に実施し、出土品整理・報告書作成に係わる契約は平成24年3月31日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：コアガステック株式会社（代表取締役 田中昌明）

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝

次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：立石雅文

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 古賀正美 園井正隆

課 主 査：白木 守 事務主査：近澤康治

庶務担当：豊福早苗

調査担当：廣木 誠 整理担当：米澤美詠子

発掘調査臨時職員

秋吉力・緒方具美・勝田美代子・合戸喬一・塚本明美・津留崎利子・原口貞子・細江チヅ子

発掘調査整理臨時職員

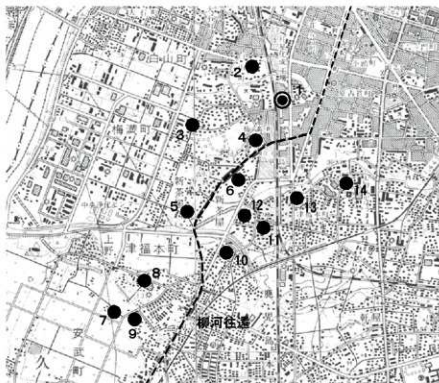
石橋和子

II. 中原遺跡の位置と環境

中原遺跡は久留米市役所から約1.2km南西の梅満町に所在する。標高312mの高良山を西端に有する耳納山地から西へ派生するゆるやかな丘陵は、いくつかの小河川によって開析され、筑後川の氾濫原に舌状に張り出す複数の台地を形成している。本遺跡は小河川のうちの一つである芋掘川に開析された大隈台地の基部付近に位置し、標高は約10mを測る。

本遺跡近辺の調査事例は少ないものの、縄文時代から近世にかけての貴重な成果が得られている。縄文時代では津福寺山遺跡で早期の土器が、山ノ内遺跡や庄屋野遺跡でおとし穴遺構が検出された。特に、庄屋野遺跡第3次調査では多数のおとし穴遺構を列状に配置した状況が明らかとなっており、当該期の狩猟生活を考えるうえで貴重な成果が得られている。弥生時代になると宮ノ木遺跡において後期の井戸や土坑・溝が確認され、古墳時代では田中遺跡・津福西小路遺跡・津福古賀畑遺跡で4世紀の堅穴建物が検出された。後者は、市内における古墳時代の集落でも最も古い集落が一体に存在する可能性を示唆している。古墳時代の遺構は市街地では検出例に乏しく、今後における調査の進展が期待される。

律令期の筑後国は10郡を管轄し、本遺跡の所在する梅満町一帯は三藩郡鳥養郷に属することとなる。鳥飼小学校校庭遺跡では奈良～平安時代の溝や土墳墓、宮ノ木遺跡第1次調査でも奈良時代の溝が確認されている。また、白山遺跡では奈良時代の堅穴建物と掘立柱建物が確認され、鳥養郷比定地において初めて建物跡を検出した貴重な調査事例である。中世期で注目される遺跡としては、



第1図 中原遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

遺 跡 名

- 1 中原遺跡
- 2 白山遺跡
- 3 大隈村館跡
- 4 鳥飼小学校校庭遺跡
- 5 宮ノ木遺跡 (第1次)
- 6 宮ノ木遺跡 (第2次)
- 7 庄屋野遺跡 (第1～4次)
- 8 庄屋野遺跡 (第5・6次)
- 9 庄屋野遺跡 (第7次)
- 10 山ノ内遺跡
- 11 田中遺跡
- 12 津福西小路遺跡
- 13 津福寺山遺跡
- 14 津福古賀畑遺跡

大隈台地西端に位置する大隈村館跡が挙げられる。大隈村館跡は鎌倉・室町時代に存在したと考えられる城で、大隈左近将監の居城といわれる。文政7（1824）年に城の東構口から礎石を3個掘り出したとの記事が『筑後将士軍談』に記載され、また、大隈氏の家老の末裔を「名原」氏と称す記事も窺える。これは、本遺跡の所在する地区を「中原」ということから、字名の由来と推定される。この他、津福西小路遺跡や田中遺跡からは13世紀代の土壘墓が検出されているのをはじめ、鳥飼小学校校庭遺跡の調査でも中世後期の溝や土坑が確認された。近世期を迎えると久留米城下町の整備や、慶長8（1603）年、久留米城と柳河城とを結ぶ柳河往還が開通し、中原遺跡の近辺でも農村が形成されて、近世の足跡を遺していくことになる。



第2図 中原遺跡調査地点図（1/1,500）



第3図 中原遺跡第3次調査区全景（南から）

III. 調査の記録

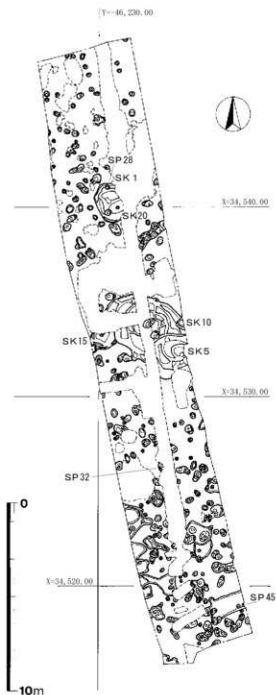
1. 調査の目的と経過

本調査地は、第1次調査地の北西約120m、第2次調査地の東10m程に位置する。第1次調査は平成6年度、第2次調査は平成17年度に実施されている。また、本調査地の北西側、苧抜川を挟んだ台地上には白山遺跡が所在し、第1次調査が平成19年度に行われた。本遺跡第1次調査では江戸時代と推定されるビットを確認したのみであるが、第2次調査では8世紀代の土坑及びビットを検出し、白山遺跡第1次調査では8世紀の堅穴建物1棟、掘立柱建物1棟が確認された。先述したように、中原遺跡が所在する梅満町一帯は律令期に三渚郡鳥養郷の範囲に含まれると考えられ、鳥飼小学校校庭遺跡や宮ノ木遺跡においても、当該期の遺構が散見される。従って、今回はこれらの成果を念頭に置き、遺構群の広がりを確認することを目的とした。

現地調査は、平成23年7月20日から重機による表土剥ぎを開始した。表土を除去した部分から遺構検出及び平板測量を実施し、略図作成が終了した調査区北側より遺構の掘削を開始した。遺構実測、写真撮影は随時行い、8月9日に遺構の掘削を完了した。翌10日にスカイマスターを用いて全景写真撮影を実施した。補足調査終了後の12日に重機で調査区を埋め戻し、発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。土層断面図(1/10・1/20)は手測りで作製したが、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、マミヤRB67を用いてカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。

2. 検出遺構

本調査地の周辺地形は、南から北へ緩やかに傾斜し、調査地の北側約80mで苧抜川に解析された低地に至る。調査対象地は近代以降、頻繁に土地利用されたと考えられ、遺構の削平や攪乱が著し



第4図 中原遺跡第3次調査遺構配置図(1/200)

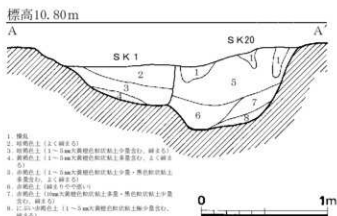
い。基本層序は、調査区西壁南側では盛土が約0.5m、灰褐色の間層が0.3～0.4m、褐色土の遺物包含層が約0.1～0.2mであるが、全体的に遺物包含層の残存状況が極めて悪い。遺構検出面である地山面までの深さは、北側で約1.3m、南側で1.0m程度を測り、検出面の標高は北側で約10.4m、南側で10.7mである。

検出遺構は土坑5基とピット群で、遺構は特に調査区中央から南側にかけて密に分布している。以下、主要遺構について報告する。

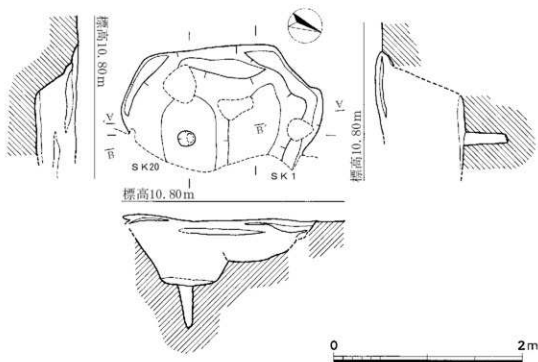
土坑

SK1（第5～7図）

調査区中央のやや北側で検出した。東側に大きく擾乱を受ける。検出段階でSK1とSK20は同一遺構であると判断し、土層観察のため南北方向に半截し掘削を開始した。結果、SK1はSK20に後出することが判明した。規模は長軸が1.2m+α、短軸が1.1mを測り、平面形は歪な長円形と推定される。底面は南側にゆるやかに傾斜しており、深さは最深部で45cmを測る。壁面は南側がほぼ垂直に、西側が外傾して立ち上がる。また、北側がゆるやかに立ち上がったのち外傾する。埋土は、3層に

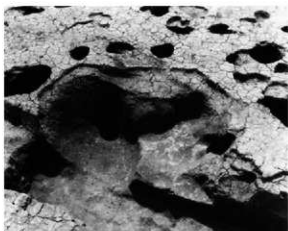


第5図 SK1・20土層断面図 (1/30)



第6図 SK1・20実測図 (1/40)

分けられ、上・中層に暗褐色土が、下層に黄褐色土が堆積し、北側から流入した状況を確認できた。埋土内からは縄文土器片が出土したがSK20の混入品である。



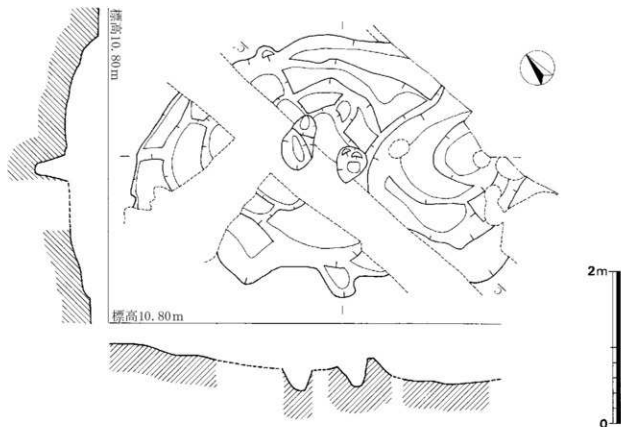
第7図 SK1 + 20完掘状況（北東から）



第8図 SK5完掘状況（北西から）

SK5（第8～10図）

調査区中央で検出した。著しく攪乱を受けており、東側の一部が調査区外に広がる。検出規模は長軸が5.5m + α、短軸が3.1m程度であり、平面形は小判形を呈すると思われる。断面形状は南東側に向かって徐々に深くなり、最深部で約55cmを測る。埋土は締まりのある褐色系の土で、下層は



第9図 SK5実測図（1/50）

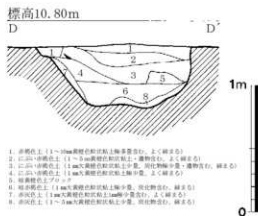
粒状・ブロック状の粘土を多く含む。また、部分的に炭化物を含む層を確認できた。埋土内からは土師器の坏・甕、須恵器の蓋・坏・壺、鉄釘などが出土した。

SK10 (第11図)

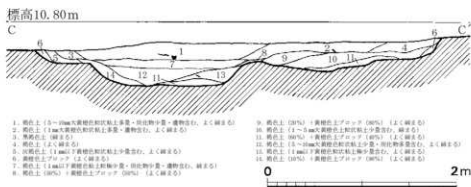
調査区中央東側で検出した。SK5に先出する。東半が調査区外に伸びるため、平面形は不明であるが、検出規模は長軸が約0.8m、短軸が0.4m+αで、深さが40cm程を測る。底面はレンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がったのち外傾し、上端に至る。埋土は赤褐色土の単層で、埋土内からは小礫が出土したのみである。

SK15 (第12～14図)

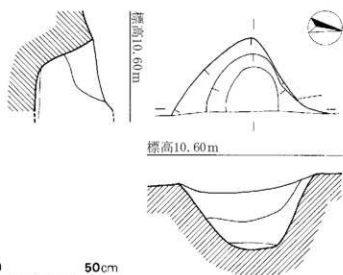
調査区中央西側で検出した。SK10に先出する。北側の大部分が掘乱を受け、西側の一部が調査区外に伸びるため全容は不明である



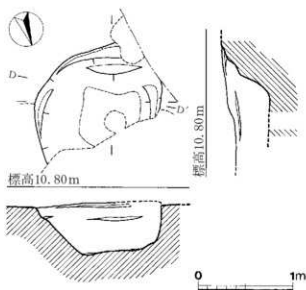
第12図 SK15土層断面図 (1/30)



第10図 SK5土層断面図 (1/40)



第11図 SK10実測図 (1/20)



第13図 SK15実測図 (1/40)

が、検出規模は長軸が約 $1.3\text{m} + \alpha$ 、短軸が 1.3m で、平面形は楕円形あるいは長楕円形を呈すると推定される。深さは約 50cm を測り、床面は緩やかな凸レンズ状である。壁面は西側が大きく内湾したのち、中程からほぼ垂直に立ち上がる。南壁と東壁は外傾して立ち上がり、上端近くに狭長なステップを有している。埋土は赤色土を基調とし、中層には多量の黄橙色を呈するブロック状の粘土を、その他の層には粒状の粘土を含んでいた。埋土内上層からは縄文土器の鉢の細片が出土している。

S K 20 (第5～7、15・16図)

調査区中央のやや北側で検出した。S K 1に先出する。検出段階でS K 1と同一遺構であると誤認し、また、東側に攪乱を受けているため平面形は不明である。規模は長軸が $1.2\text{m} + \alpha$ 、短軸が $1.0\text{m} + \alpha$ を測り、深さは 70cm である。底面はレンズ状で、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は赤褐色系の土が自然堆積している。埋土内からは縄文土器の鉢の細片および削器が出土した。

底面では径 18cm のビットを検出し、断ち割りを実施した。結果、深さは 42cm を測り、底面の断面形状は鋭角で、壁面はほぼ垂直であった。また、埋土は上層に赤褐色砂質土が、下層に黄褐色砂質土が堆積する。埋土内からは縄文土器鉢の細片が1点出土した。

ビット

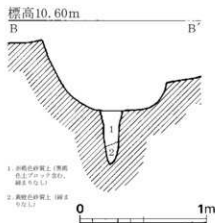
調査区全面から検出した。大半が径約 $30\sim 40\text{cm}$ を測り、深さは 50cm 前後のものが多い。中には 1m 近く掘り込まれたものも確認できた。いずれのビットからも柱痕や杭痕は確認できていない。埋土は殆どが暗褐色、黒褐色を呈していた。尚、S P 32からは縄文土器鉢の細片が出土している。

3. 出土遺物

今回の調査では、高い密度で遺構を検出することができたことに反して、出土遺物は少なく、総量はパンコンテナ1箱であった。その約半数はS K 5から出土している。土師器、須恵器が大部分を占め、縄文土器及び鉄製品・石器なども出土した。遺物の詳細については第1表を参照されたい。



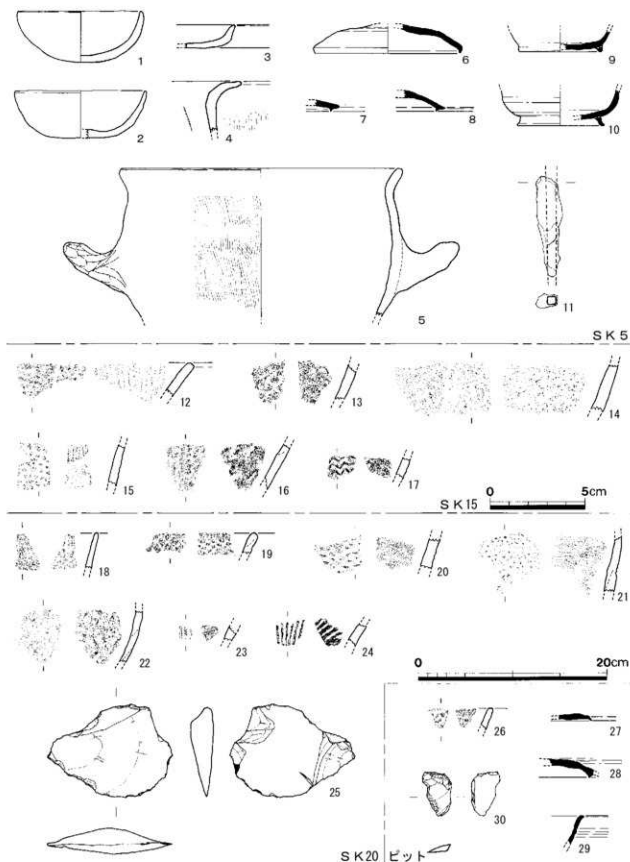
第14図 SK15完掘状況（北東から）



第15図 SK20内ビット土層断面図（1/30）



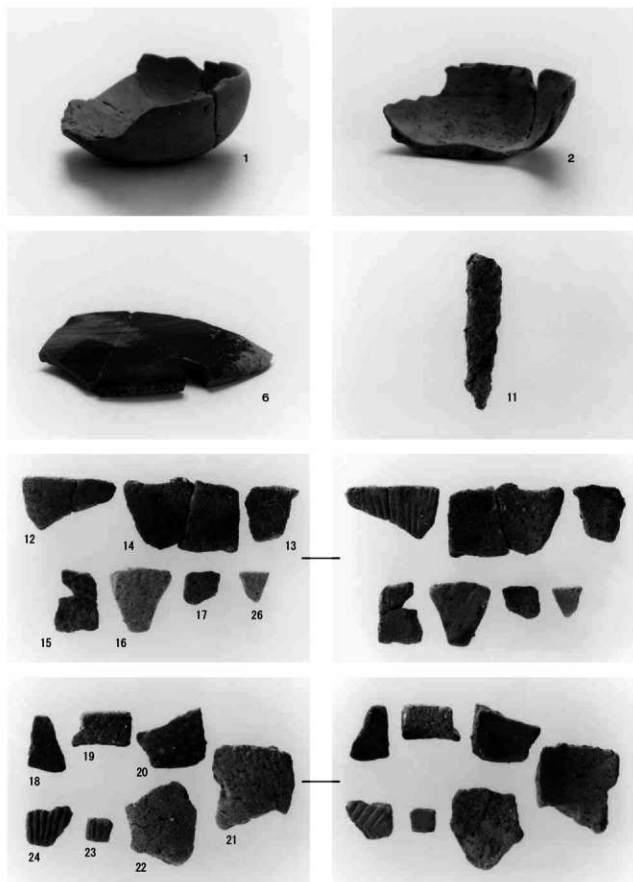
第16図 SK20内ビット断割状況（東から）



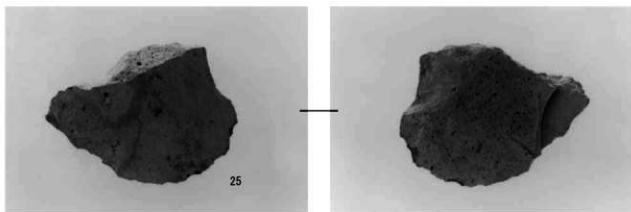
第17図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

第1表 出土遺物観察表

遺物 NO.	出土 遺物	種 別	器 形	寸 法			色 調		質 地		備 考	登録 番号
				口径 (長)	口径 (幅)	高さ (厚)	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	第17層	SK 5	土師器	杯	(13.0)	5.4	5.5	橙	橙	同軸ナデ?	同軸ナデ?	201105 000017
2	第17層	SK 5	土師器	杯	(13.0)	(7.6)	5.05	橙	橙	同軸ナデ?	同軸ナデ?	201105 000014
3	第17層	SK 5	土師器	杯	—	—	2.55	橙	橙	同軸ナデ	同軸ナデ	201105 000016
4	第17層	SK 5	土師器	壺	—	—	(5.3)	橙	橙	同軸ナデ ハケメ	同軸ナデ ケズリ	201105 000013
5	第17層	SK 5	土師器	壺	(30.0)	—	(15.7)	橙	橙～黒	同軸ナデ ハケメ	同軸ナデ	201105 000019
6	第17層	SK 5	須恵器	盃	—	(15.1)	(3.1)	黒	灰	同軸ヘラケ ズリ 同軸ナデ	ナデ?	201105 000010
7	第17層	SK 5	須恵器	盃	—	—	(1.3)	橙	黄緑	同軸ナデ	同軸ナデ	201105 000009
8	第17層	SK 5	須恵器	盃	—	—	2.2	灰オリーブ	灰白	同軸ヘラケ ズリ 同軸ナデ	ナデ 同軸ナデ	201105 000018
9	第17層	SK 5	須恵器	杯	—	(8.9)	(2.15)	灰	灰黄	同軸ナデ ヘラ切り	同軸ナデ ナデ	201105 000011
10	第17層	SK 5	須恵器	杯	—	8.9	(3.9)	灰	灰	同軸ナデ ヘラ切り	同軸ナデ ナデ	201105 000015
11	第17層	SK 5	鉄製品	針	(5.3)	1.4～ 0.5	0.8～ 0.5					201105 000012
12	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(3.9)	橙	黄橙	横円押型文?	原形条痕	201105 000020
13	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(3.95)	暗赤褐	橙	横円押型文	ナデ	201105 000024
14	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(5.25)	橙～黒褐	橙	横円押型文	ナデ?	201105 000021
15	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(4.5)	にぶい橙～ 橙	にぶい橙	横円押型文	原形条痕 ナデ	201105 000022
16	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(4.95)	浅黄褐	にぶい橙	横円押型文?	ナデ	201105 000023
17	第17層	SK 15	縄文土器	鉢	—	—	(2.35)	にぶい赤褐	橙	山形押型文	ナデ	201105 000025
18	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	橙～ にぶい橙	橙～ にぶい橙	横円押型文	原形条痕	201105 000002
19	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(2.35)	にぶい黄褐	明黄褐	ナデ?	横円押型文	201105 000005
20	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(3.2)	橙	にぶい橙～ 橙	横円押型文	ナデ?	201105 000007
21	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(6.0)	橙	橙	横円押型文	原形条痕?	201105 000001
22	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(5.6)	浅黄褐	にぶい黄褐	無文ナデ	同軸ナデ ナデ?	201105 000003
23	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(1.65)	橙	橙	原形条痕	ナデ?	201105 000008
24	第17層	SK 20	縄文土器	鉢	—	—	(2.55)	橙	明赤褐	原形条痕	原形条痕	201105 000006
25	第17層	SK 20	灰山石	磨器	4.95	6.65	1.4					201105 000004
26	第17層	SP 32	縄文土器	鉢	—	—	(2.35)	橙	橙	横円押型文	ナデ	201105 000027
27	第17層	SP 45	須恵器	盃	—	—	(0.8)	灰	灰	同軸ナデ	同軸ナデ	201105 000029
28	第17層	SP 45	須恵器	盃	—	—	(2.7)	灰黄	灰	同軸ヘラケ ズリ 同軸ナデ	同軸ナデ	201105 000028
29	第17層	SP 28	須恵器	盃	—	—	(3.2)	灰	オリーブ黒	同軸ナデ	同軸ナデ	201105 000026
30	第17層	SP 45	黒曜石	刮片	2.35	1.55	0.4					201105 000030



第18図 出土遺物 (写真①)



第19図 出土遺物（写真②）

IV. 考察

本調査は、宅地造成に先立つ事前の発掘調査である。今回は対象地内に敷設される道路部分の193㎡について調査を実施した。結果、土坑5基、及びピット群を検出することができた。ここではこれらの遺構について若干の整理を行い、まとめたい。

検出遺構は、縄文時代の遺構と奈良時代の遺構に分けることができる。まず、縄文時代の遺構についてはSK10・15・20及びSP32が挙げられる。SK20は埋土が自然堆積の様相を呈すること、底面から土坑に伴うピットを検出したことから、おとし穴遺構と考えられる。底面のピットについては下部の断面形状が鋭角であるため、ピット掘削後に杭状のものを打設した可能性がある。おとし穴遺構は一般的に遺物を伴うことが少ないが、本遺構からは押型文土器が出土し、早期の所産と思われる。SK15はSK20と同時期であることからおとし穴遺構の可能性もある。SK10はSK15・20と埋土が近似するため同時期と推測されるが、性格については不明である。ピットは確実に当該期の所産と考えられるものはSP32のみであり、配置状況からおとし穴遺構と有機的関連をもつとは言い難い。中原遺跡第2次調査では同時期のピットやおとし穴遺構は検出されておらず、また、庄屋野遺跡のようにおとし穴遺構が意図的に配列された状況を読み取ることはできない。従って、今回の調査で検出したおとし穴遺構は、現時点では散在的に配置されたものと思われる。

次に、奈良時代の遺構はSK1とSK5及びピット群である。SK5は7世紀後半の遺物を含むが、8世紀前半の遺物と同一層で出土したものも含まれるため、後者の時期と考えられる。廃棄土坑として利用されたのであろう。SK1は遺物が出土していないため明確な時期・性格を特定できない。但し、SK1に後出するピットから須恵器壺の口縁片が出土したこと、土坑の埋土がSK5に類似することから8世紀頃の所産と推定される。

今回の調査は、調査面積に限りがあったにもかかわらず、貴重な成果をあげることができた。すなわち、本遺跡で初めて縄文時代の遺構・遺物を検出できたこと、律令期の遺構群の広がりを確認できたことである。今後、台地が広がる東側や南西側などにおいて調査が進むとともに、本遺跡の各時代の様相が次第に明らかになると思われる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかほらいせき だいさんちほくくつちようさほうこく
書 名	中原遺跡 —第3次発掘調査報告—
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第317集
編 著 者 名	廣木 誠
編 集 機 関	久留米市役所 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発 行 年 月 日	平成24年(2012) 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかほらいせき 中 原 遺 跡 第3次調査	くろめしうめみつまち 久留米市梅満町 556-3, 559-7, 560-11, 566-5	40203	—	33° 18' 37"	130° 30' 12"	20110720 ～20110812	193㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
中 原 遺 跡 第3次調査	集 落	縄文	おとし穴遺構	1基	縄文土器、石器		律令期の三瀬郡烏養郷に 関連すると思われる遺構を 検出したことに加えて、本 遺跡において初めて縄文時 代の遺構・遺物を検出して いる。	
			土坑	2基				
	奈良	ビット						
		土坑	2基	土師器、須恵器、鉄製 品				
		ビット						
要 約								
第3次調査地点は、久留米市役所の南西約1.2kmに位置し、本遺跡付近は律令期において「三瀬郡烏養郷」に比定されている。今回の調査では奈良時代の遺構を検出し、本遺跡における同時代の遺構群の広がりを確認することができた。また、過去の調査では確認されていなかった、縄文時代の遺構・遺物を検出するなど、貴重な成果を得ることができた。								
土木工事の届出日		平成23年6月22日			遺物の発見通知日		平成23年8月17日 (23文財第505号)	

中原遺跡

—第3次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第317集

平成24年3月31日

発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課
印刷 永松印刷
久留米市中央町20-22